

人権週間ギャラリー展

大谷派における解放運動の歴史と課題Ⅱ

朝野温知(李壽龍) - 宗教に差別のない世界を求めて -
イ スリョン



会場 真宗本廟(東本願寺)参拝接待所ギャラリー
2009年12月3日(木)～24日(木)

監修 水野 直樹 (京都大学人文科学研究所長)
朝治 武 (大阪人権博物館学芸員)
泉 恵機 (元大谷大学教授・清休寺住職)

企画 真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部

開催にあたって

昨年からテーマを「大谷派における解放運動の歴史と課題」と題して人権週間ギャラリー展を開催しています。初年度は、大谷派における解放運動の先駆者である武内了温師にスポットをあて、師の生涯を振り返りながら、大谷派における草創期の解放運動を紐解きました。

今年は、サブテーマを「宗教に差別のない世界をもとめて」として、武内了温師に出会い、師の志を受け継いだひとりである朝野温知師(後の真宗大谷派同和委員会委員長)の足跡を辿ります。

朝野師は、1906年朝鮮京畿道に生れ、朝鮮名を李壽龍(イ・スリョン)といいます。旧兩班(ヤンバン:朝鮮の上流階層)の家系でしたが、早くに父を亡くしたため生活は困窮を極めました。多感な少年時代を韓国併合からはじまった日本による植民地政策のもとで過ごし、その中で日本文化に興味を持ち18歳で日本に渡る決心をします。その航海の途中、関釜連絡船の中で民族差別の実態を目のあたりにし、強い衝撃を受けました。

日本に渡って最初は、『京城日報』東京支局に勤めましたが、「内鮮融和」問題で支局長と対立、職を辞した後は放浪生活に入りました。偶然にも東本願寺の門をたたき、彼の生涯に大きな影響を与えた武内了温師と野間修師(後の大谷派同和会会長)に出遇います。師は、この二人との出遇いを通して、水平運動に参加することになりました。

1945年10月、得度して大谷派の僧侶となります。翌年、東本願寺社会課から「同和事業滋賀県駐在員」の任命を受けました。滋賀県木ノ本町を終の棲家とし、大谷派僧侶として、また県下の解放運動の指導者として運動の一翼を担いました。

大谷派にあっては、真身会解散の翌年に立ち上げた大谷派同和会を支え、後には大谷派同和委員会の委員長を務めます。大谷派が部落解放同盟中央本部の糾弾を受けた際には、糾弾を正しく受けとめ、真の同朋教団たらしむべく奔走した宗門における解放運動の中心存在でありました。

「正しいご信心を頂いているならば、(略)明るく、住みよい社会をつくるために、無言の努力をはらうべきであります。如来の願心は、衆生と共に、よき社会に住みたいというところにあるからであります。(略)如来は荷負群生といわれました。真実の光明は、現実社会の苦悶のなかからのみ、みいだされるものであります」(『光明への道』抜粋:1966年)

という言葉は師の志願を表明しています。

民族差別と抑圧・貧困の直接の経験から紡ぎだされた言葉は、師をもって今もなお、大谷派における解放運動とは何かを問うて止みません。

2009年11月

真宗大谷派宗務総長 安原 晃

本展の開催にあたり、所蔵者をはじめ、関係諸機関、関係諸氏のご協力、ご助言に加え、展示協力をいただきました。ここに記して、心よりお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

大阪人権博物館 水平社博物館 京都部落問題研究資料センター 解放出版社
東京経済大学図書館 社団法人福岡人権研究所 信楽会館 普賢寺 圓重寺

I 朝鮮人・李壽龍として

あさのよしとも
朝野温知は、朝鮮名を李壽龍（イ・スリョン）
といひます。李壽龍は、1906年に朝鮮（当
時は大韓帝国）の京畿道坡州郡州内面坡州里に
生まれました。

ソウルの北西40 Kmほどのところに位置す
る坡州郡（現在は坡州市）は、臨津江が流れる
平野地帯で、王都漢城（現在のソウル）に近い
ため、王族の墓なども多く、儒学の盛んな地域
でした。現在は、南北の軍事境界線のすぐ南側
にあり、臨津江より北側の坡州市域は民間人が
自由に通行・居住することのできない区域とな
っています。南北軍事会談が開かれる板門店
は坡州と北の開城との境界線上にあり、南北を結
ぶ鉄道も坡州を通過しています。

李壽龍の家は、両班（朝鮮の上流階層）に属
していましたが、壽龍が生まれる前に没落した
ため生活は苦しかったといひます。父が早く死
去したため、壽龍は普通学校（日本の小学校に
あたる）を中退してソウル（当時は京城府）に
働きに出ました。日本の植民地支配の中心都市
であったソウルには、日本の会社や銀行が集ま
っており、そこで仕事を転々とした壽龍は、近
代の文化に触れる中で日本での勉学を志すよう
になりました。

1924年、18歳の時に友人と二人で日本
に渡りました。しかし、そこで出会ったのは朝
鮮人に対する激しい差別の現実でした。関釜連
絡船では、朝鮮人であるため船底の三等船室に
押し込められ、税関の検査でもきびしく調べら
れたといひます。また、東京で雇われた京城日
報（朝鮮総督府の御用新聞）の支局では、口先
で「内鮮融和」を唱える支局長と対立すること
になります。そのため、壽龍は仕事をやめ、放
浪のすえ、京都の東本願寺を訪れ、そこで社会
課長武内了温と出会いました。

すでにガンジーなどの思想に触れていた李壽
龍は、武内から借りた水平運動関係の書物を読
むとともに、武内の紹介で滋賀県の河瀬村広野
にある説教所に赴きました。しかし、その後も
しばらく各地を放浪したり、大谷大学に籍を置
いたりした後、1929年に再び広野に戻ります。
広野にいた時期には、クロボトキンやバクー

ニンなどアナーキズムに傾倒し、『自由評論』と
いう雑誌を発行して、アナーキズム運動を展開
します。李壽龍は、アナーキズムに接近した理
由を、父や祖父から受けた儒教の教えに対する
反発からだった、と述べています。儒教を基礎
とする朝鮮の文化への反発から、近代文明にあ
こがれ、さらにアナーキズムに近づいたといえ
るかもしれません。

アナーキズム運動を展開する中で水平社運動
にもかかわりを持ちます。しかし、1935年
に無政府共産党事件に連累したとの容疑で検挙
され、治安維持法違反で起訴、懲役2年6ヵ月
の判決を受け、刑務所で服役しました。刑務所
の中で仏教、なかでも親鸞の教えに目覚め、「転
向」を表明します。

出獄後、武内了温の松林寺（兵庫県）に寄宿
しながら、『教学新聞』などに多くの文章を発表
し、また朝鮮にも一時帰りました。1940年、
朝鮮で「創氏改名」が実施されると、李壽龍は
朝野温知を名乗るようになります。

しかし、「朝野温知」になってからも、朝鮮人
であることをやめ、日本人になりきったわけ
ではありません。朝鮮に帰った後には、「今度こそ
私は自分が朝鮮人であることをハッキリ識った。
私は朝鮮が好きになった。もう理窟を抜きにして、
私は朝鮮人が好きになった」と書き、さらに朝
鮮語使用禁止の政策を批判するなど、朝鮮人と
しての意識をいっそう強くもつようになったと
思われます。また、当時の融和運動（大和報国
運動）に対して、部落内に住む朝鮮人の問題を
軽視していると批判する文章を発表しています。

戦後、部落解放運動に身を投じましたが、一
時は外国人登録令違反で大村収容所に送られる
など、朝鮮人であるがゆえの弾圧も受けました。

1960年、李壽龍は帰化（日本国籍取得）
の許可を受け、戸籍上も「朝野温知」となりま
した。しかし、その後も朝鮮人の立場からの発
言をしたり、韓国にいる妹と連絡をとったりし
ています。終生、朝鮮人としての意識をもちな
がら差別とたたかい、民族をこえて普遍的な真
理を求め続けたといひます。

●私は飢餓線を何年間も彷徨して涙ながらに、人の与へる冷飯を食った経験が嫌やと言ふ程ある人間であり、朝鮮人だと言はれて悲哀に泣いたことは幾度あったか知らない人間なのだ。

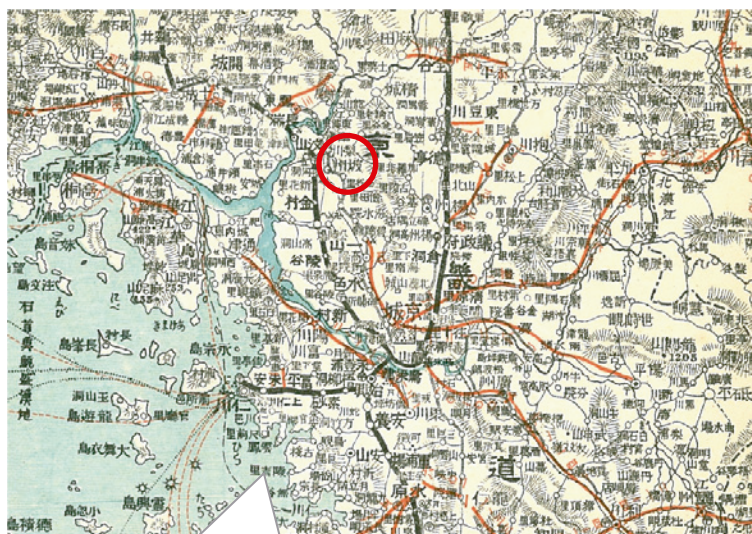
(「半島インテリの指嚮5」／『教学新聞』／1939年4月23日)

●一步船に乗りかけてからは、そこにかもしだされた異様な雰囲気につよいショックを受けた。それはまさしく、植民地と本国とを結ぶ支配国の露骨な正体の誇示であった。／タラップから船室に行くまでの間、私はいやというほどに、「お前は鮮人だぞー」ということを知らしめられたし、同じ料金を払っている筈なのに、わたしたちは三等船室でも、もう一段低い船底に詰めこまれた。そして下関で下船する時には、降り口が違って、税関の検査も厳しく、係員の態度も傲慢で、すくなからず自尊心を傷つけられた。

(「わたしの履歴書1」／『部落』4月号／1967年4月1日)

●東京に出てからの、わたしを取りまく雰囲気は、恩恵的な内鮮融和の掛声と社会主義運動の高まりであった。わたしは内鮮融和という言葉が嫌いであった。そうかといって自分自身に自己嫌悪を感じ、人生問題に悩む一面のあったわたしは、社会主義にもついて行けなかった。そういうことで、宗教や哲学に救いを求め、印度独立の聖者マホトマ・ガンジーの無抵抗不服従運動に非常に興味を感じ、〔下略〕

(「わたしの履歴書1」／『部落』4月号／1967年4月1日)



●『朝鮮里程全図』大阪十字屋、1928年、部分

李壽龍の故郷・坡州は、京城(現・ソウル)の北西に位置している。



●滋賀県彦根市広野の普賢寺

李壽龍は1926年に河瀬村広野の説教所に入り、その後も広野で活動した。説教所は、戦後、普賢寺と名づけられた。



●滋賀県石山村の東洋レーヨン工場建設労働者の集会で応援演説する李壽龍(中央右)

1930年代半ばの建設工事には多くの朝鮮人労働者が従事したが、待遇改善を要求する争議が起きた。石山村の昭和俱樂部会館で労働者の集会が開かれ、李壽龍も応援に駆け付けた。正確な時期は不明。



●朝鮮の緑旗聯盟機関誌『緑旗』1940年9月号の表紙(東京経済大学図書館所蔵)

この号に、朝野温知(旧名李壽龍)「観念純化の過程を顧みて」が掲載されている。『緑旗』には、これを含めて朝野温知の文章が3回掲載された。

●私の故郷とは何処であるか、それはわからなくなった。だが、今度こそ私は自分が朝鮮人であることをハッキリ識った。私は朝鮮が好きになった。もう理窟を抜きにして、私は朝鮮人が好きになった。

(「京城に帰って1」／『教学新聞』／1939年11月2日)

●現在内鮮一体が高調されてゐるが、それは半島的なものゝコントロールであり、日本的なものゝ無条件模倣であるかの如くに言はれる向きもあるやうだ。これは許されないことである。日本にだって欠陥はあるし、半島にだって立派なものはある。だから一方的強制をやることは半島を誤らすのみでなく、人類文化を攪乱することである。

(「半島に於ける新生活運動5」／『教学新聞』／1940年3月3日)

この文章は京城(現・ソウル)で発行される雑誌『緑旗』1940年4月号にも掲載された。

●私は半島の産れとして永年の間この問題「部落内の朝鮮人問題」に特殊な関係をもって来たのである。過去数年間私はこの問題を忘れることが出来なかった。

(「融和新体制に対する若干の批評と希望3」／『教学新聞』／1940年12月23日)

●その道場（産業青少年特別錬成京都道場）での私の仕事は、庶務主任と講師の兼任のようなものであった。私が八紘一字や聖戦を連呼し、手におえない連中には怒声をあびせるようなこともしたので、今から考えると、私の一生を通してもっとも正体を失っていた時代だったと、冷汗がでるのである。

とにかくもそうしているあいだはまったく安泰であって、ひもじさも知らずに私は戦時中をおくった。これは、戦争の重圧で私の精神状態が相当おかしくなっていたことを意味するものであった。

（「部落の保育園長（1）」／『教化研究』第62号／1970年6月5日）

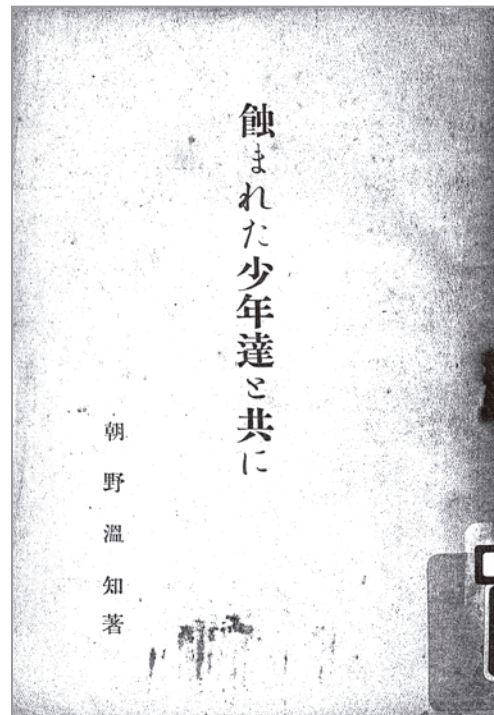
●私は宗教を中心として、人間が人間を差別しない世界をつくりたいんだ。特に朝鮮人が日本人に差別されることのない、そういったものを、私がいま考えられるかぎりには宗教しかない。その宗教の世界に、民族を超越した心と心との結びのできる世界を築きたいと思う。

（「宗教に差別のない世界を求めて」／『差別のなかを生きぬいて—私の歩んできた道—』／1978年1月）



●朝野温知(旧名李壽龍)「大陸の詩人(三)」『教学新聞』1940年7月18日

東京で発行される宗教関係新聞『教学新聞』に、李壽龍は1939年4月から多くの文章を書いているが、1940年7月14日から連載した「大陸の詩人」で「朝野温知」の名前を使いはじめた。「旧名李壽龍」と書いているのが注目される。



●朝野温知『蝕まれた少年達と共に』常盤学園発行、1942年
京都の少年保護施設常盤学園での体験を記した単行本。その後、常盤学園は舞鶴海軍工廠の産業青少年特別錬成京都道場に改編され、朝野は主事を務めた。

Ⅱ 部落解放運動の先頭に立って

朝野が部落問題を知るようになる契機は、1925年12月に東本願寺を訪ねて社会課の野間修と武内了温との出会いです。その後、朝野は京都・山科の武内宅に6ヵ月にわたって寄留することになりました。そして武内宅の本棚にあった全国水平社創立を呼びかけたパンフレット『よき日のために』や栗須七郎の『水平道』など、水平運動に関する著作や雑誌を読むようになりました。とくに朝野が感銘を受けたのは、1922年3月3日に創立された全国水平社の宣言、いわゆる「水平社宣言」でした。宣言の末尾にある「人の世に熱あれ、人間に光あれ」は「人間社会に絶望していた者でないと叫べない言葉である」とし、さらに創立大会の綱領にある「吾らは人間性の原理に覚醒し、人類最高の完成に向かって突進す」は「人間の尊厳を踏みにじられてきたものが、なおかつ自らの尊厳を誇らしく主張するとともに、それに値する人間になろうとする理想を抱いている者の、やみがたい願いであった」として、水平運動の精神に強い関心をもつようになりました。

このような水平運動の精神への強い関心から、朝野は滋賀県の部落の説教所に入ることになりました。部落は厳しい差別と貧困の真只中にありましたが、朝野は部落に言いようのない親近感を抱くようになりました。それは、部落に「文明に毒されていない原始的な素朴さと、人間的な暖味が充ちあふれていた」からでした。また自らが朝鮮人であり、相手が部落民であっても「人間には変わりがない」ということが通用したといいますが、それは朝野が「どちらも日本人に差別されている被害者同士である」といういたわりが、言外の行動のなかにひめられている」と感じたからでした。しかし部落には部落解放を目指そうとする水平運動はなく、宗教によって「差別の苦しみと非文化的状態に諦めていくことを教える」教化者としての自らを反省し、部落を去ることになりました。

部落を去った朝野は各地を放浪しつつ思想遍歴を繰り返し、大谷大学では西洋の虚無思想に惹かれていきました。そして再び部落に戻り、今度は積極的な生き方を探るためにドストエフスキーをはじめとしたロシア文学に傾倒していきました。そして遂に「社会性のないところには行動への発

展がない」と考えるようになり、大杉栄やバクーニン、クロボトキンらの著作に導かれて無政府主義に活路を見いだしました。朝野にとって無政府主義は、まさに「宗教味を多分にもつ理想主義であり、国境や民族の人為的制約を越えて、人類が地球の上で幸せに生きて行くことを主張する人道主義」だったのです。

1933年3月から部落に程近い場所に家を借りて社会運動に身を投じるようになり、9月からは高松結婚差別裁判闘争を闘うなど水平運動に参加するようになりました。水平運動に参加してからは、全国水平社総本部の井元麟之を通じて中央委員長の松本治一郎を知るようにもなりました。そして1934年5月には滋賀県で起こった愛知川署の差別事件や日枝小学校の差別事件において指導力を発揮しました。朝野は、まさに滋賀県における水平運動の中心的存在になったのです。しかし、1935年10月に朝野は無政府共産党に加盟したとして治安維持法違反によって検挙され、2年6ヵ月間にわたって投獄されることになりました。日中戦争の翌年にあたる1938年に出獄した朝野は翌年から『教学新聞』などに多数の原稿を執筆し、1940年には大政翼賛会に連動して全国水平社や融和運動関係者によって結成された大和報国運動に期待を示しました。しかし朝野が期待したのは、大和報国運動が部落問題だけでなく、朝鮮人に対する民族差別の撤廃でした。

アジア・太平洋戦争終結の翌年の1946年、朝野は滋賀県生まれの南梅吉が京都市で結成した人種解放同盟に関係し、また全国水平社の伝統を引き継ごうとした部落解放全国委員会につながる滋賀県民主同盟の結成に参加し、組織部長になりました。1948年には虎姫町長差別事件差別糾弾闘争を指導し、1949年10月には部落解放同盟滋賀県連合会結成の中心となり、書記長に就任しました。その後、朝野は部落解放運動だけでなく在日朝鮮人に対する差別撤廃にも積極的に取り組み、数々の闘争を指導しました。また、1965年から5期にわたって滋賀県連合会の副委員長を務め、1965年からは中央委員に就任するなど、朝野は滋賀県のみならず全国的な部落解放運動に重要な位置を占めました。

〔ママ〕

●水平宣言の末尾にあるあの有名な言葉一人の世に熱あれ、人間に光あれ—これは人間社会に絶望してきた者でないと叫べない言葉である。そして「吾等は人間性の原理に覚醒し、人類最高の完成に向って突進す」という綱領に含まれている精神は人間の尊厳を踏みにじられてきたものが、なおかつ自らの尊厳を誇らしく主張するとともに、それに値する人間になろうとする理想を抱いている者の、やみがたい願いであった。ガンジーに傾倒し、親鸞に憧れて、そこまで辿りついてきて、暗中模索に疲れていた私にとっては、これは全く救いの呼びかけでもあった。

（「在日朝鮮人と部落解放運動の連帯について」／『部落解放』第51号 特集＝部落に住む朝鮮人の問題〔上〕／1974月2月10日）

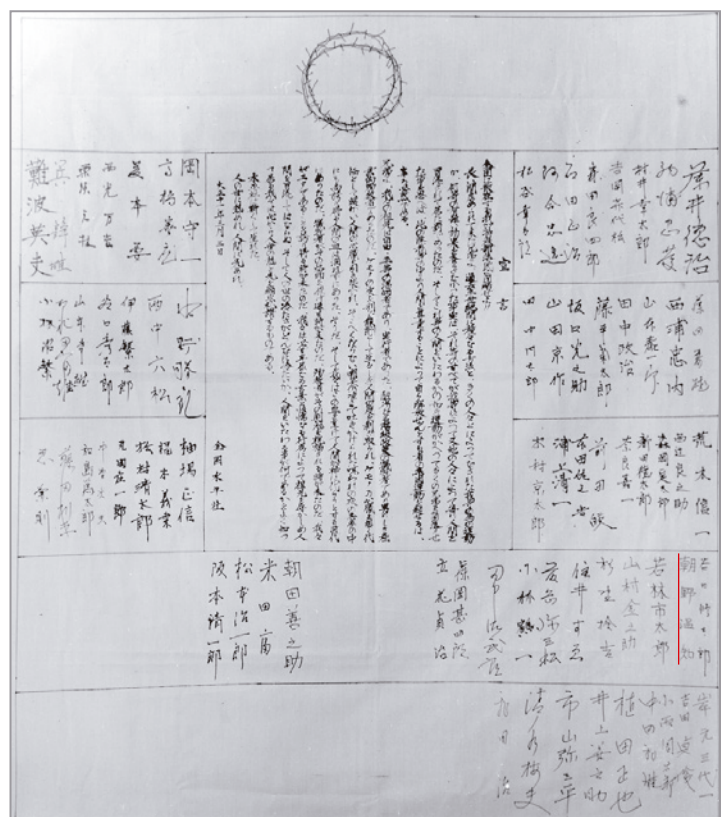
●はじめて見る部落のすさまじい状態にはどぎもを抜かれる思いであったが、日がたつにしたがって、私はそこの住民たちに、いうにいけない親近さをおぼえるようになって行った。そこには文明に毒されていない原始的な素朴さと、人間的な暖味が充ちあふれていた。腹が立てば大声でわめき合い、嬉しいことがあれば手離しで喜び合う。なんの気取りも見栄もない人間の集団がそこにあった。私にはこの天真爛漫な自由さがほしかった。私はこの人たちの中では自分のありのままの姿をさらけ出しても、何も気にすることはなかった。彼らから軽蔑されることもなかった。私が朝鮮人であり、相手が部落民であっても、人間には変りがないということが文句なしに通用した。そしてどちらも日本人に差別されている被害者同志であるといういたわりが、言外の行動のなかにひそめられていることを知った。

（「在日朝鮮人と部落解放運動の連帯について」／『部落解放』第51号 特集＝部落に住む朝鮮人の問題〔上〕／1974月2月10日）



●「荊冠友の会」結成総会にて選出された役員の集合写真
1965年10月29日奈良市あやめ池桃山荘にて

「荊冠友の会」結成総会での集合写真。一段目の松本治一郎、西光万吉、朝田善之助らとともに、二段目の右から二人目が朝野温知。



●「荊冠友の会」結成総会記念寄せ書き
手書きの全国水平社創立宣言を囲むように会員が署名している。



●愛知川署糾弾闘争ニュースNO.1

1934年5月6日、愛知川署(滋賀県)による不当逮捕、暴行拷問に対する糾弾闘争を伝えるニュース。朝野は中心となってこの運動に参加する。



●「融和新体制に対する若干の批評と希望(完)」、『教学新聞』1940年12月28日

朝野は、戦時体制のもと全国水平社や融和運動関係者によって結成された大和報国運動に期待する一方で、朝鮮人への民族差別に対する運動が取り上げられていないことへの批判をしている。

●全国水平社運動は、意識的にこの両者〔部落問題と朝鮮人問題〕の精神的連繋をなす所の何等の働きもなしてはゐないけれども、「人の世のつめたさが何んなにつめたいかゞ人間を勉はることが何であるかを知ってゐる」人達として、半島の同胞に人間的な友愛の情を感じて居ることを、私は知ることが出来た。尚同様に意識的に考慮を払ふわけではなかつたが、全国水平社運動の発展は、間接的に、部落に居住する半島同胞の生活や文化を向上せしめる事実を私は認めた。従つて、私はこの運動がもうすこし、その奥の方を掘り下げて行くなれば、政治、経済、文化運動の発展が力の統合上の必然的要求から運動の組織のうちに、内部居住半島人問題を取りあげる日が来ることを信じた。そしてその為には私は水平社運動に参加したのであつた。

(「融和新体制に対する若干の批評と希望 3」／『教学新聞』／1940年12月23日)

●同和教育とは一口にいいますと、「差別にまけない子をつくる教育であり、差別をしない社会性をもった子をつくる教育」であります。つまり、部落の子どもたちには、差別にまけない正しい理性をもった人間になるように、一般の子どもたちには、差別の間違いが理解され、正しい社会性をもった人間になるように教育することです。

(「差別をこえて」／1957年6月／真宗大谷派同和会発行)

●人権尊重とは、まことに尊いことばである。戦前の日本人の、タテの人間関係からは、まったく思いもおよばなかつた考え方である。いかなる状態におかれている人でも、これを横の人間関係でながめるようになれば、そこに当然、社会的なつながりがもたれてくる。だから、今日の社会における個人の幸福や不幸は、ひとりその個人に原因があるのではなく、幸福も不幸も、すべて社会的な関連性をもっているということを認める思想が今日の時代を支配しているということは、暗い過去を生きてきたものにとっては、まことにありがたいことにちがいない。

(「解放を求めて」／1961年2月／真宗大谷派同和会発行)



●水平社宣言碑にて、1975年3月

水平社時代の同志である松本吉之助(左)と西浦忠内(右)と共に。



●朝野温知の逝去を伝える解放新聞、『解放新聞』滋賀版、1982年3月16日

●いまさら部落差別というものがあるものかといわれるその差別が、実に根づよく、今日の社会にもものこっているからである。どこに、どんなかたちで、だれの心のうちにあるのかと反問するならば、わたしはちゅうちょなくこたえる。いたるところに、あらゆるかたちで、すべてのひとの心のなかにあるのだと。

(「解放を求めて」／1961年2月／真宗大谷派同和会発行)

●師が部落問題に心根を傾注されたのは、宗門の古い殻を破り、支配階級に利用された真宗の信仰を、新しい時代に則したのものにもどそうとする熱情からであった。水平運動が適切にそのことを指摘し、この運動の力と結ばないでは間接直接に宗門の改革をなしえないことを痛感されたからである。

(「憶・武内了温師」／『荊冠の友』第21号／1968年3月1日)

●差別と貧乏からのがれようとしている部落住民たちが精一杯努力していることが、周囲の一般住民たちに多少の迷惑をかけているくらいことは、これは黙って受けてもらわなければならない程度のものでしかない。そのことを理解してもらおうと同時に、一歩進んで、地域の部落住民の福祉を高めるために、一般地区住民が連带的協力をするということが、全く忘れられていることは、これこそおうきな差別的実態ではないのか。私はそのことを社会に呼びかける決意をした。

(「部落の保育園長(4)」／『教化研究』第65号／1971年7月30日)

●私は今年すでに六十五歳になる。解放運動には年齢は関係ないし、体の弱い割合に意欲はすこしも衰えていないが、滋賀県の運動も住民運動として大衆的基盤が確立してきたし、行政の取り組みも前向きになってきた。私の役割はすんだといってよい。これから私が余生をかけてやらなければならないことは、今日までの体験から得たものを、大袈裟にいうならば人類的視点において整理することだと信じている。現在私がつくづく思うことは、一人の人間が良心的に生きることがどんなにむずかしいことか、ということである。

(「解放運動と共に四十年」／『部落解放』第17号／1971年8月)

Ⅲ 真宗大谷派僧侶として

朝野温知は、1924年18歳で来日し、翌年末に東本願寺の門を叩いてから、1982年77歳の逝去まで60年近くの間、大谷派と関わりを持ち続けて、生涯を燃焼させた人でありました。またその長い在日の期間をとおして、被差別部落との深い関わりに生きた人でもありました。

大谷派の中で朝野温知の名前が大きく浮上するのは戦後に限られます。それも普段は忘れられていて、時として浮上するだけでしたが、それは何らかの意味で大谷派の危機においてであったと思います。

その初めは、難波別院輪番差別事件によって、大谷派に対する被差別者からの怒りの声が上がったときでありました。部落差別という問題は「専門家の関わる問題だ」とずっと考えられてきましたから、当時の当局は、大谷派教団内の“専門家”集団である「大谷派同和会」の人々の力を借りて乗り切ろうとしましたが、その中心の一人が朝野温知でありました。

度重なる糾弾会の波は、大谷派の危機を露呈しました。また第一回糾弾会の数ヶ月前の1969年4月に起こった「開申事件」によって始まった、いわゆる教団問題と時期が重なったこともあり、それは正しく大谷派教団の未曾有の危機であったと言っていると思います。

その批判は、教団外社会からの批判であると同時に「被差別門徒」衆からの批判であるということであり、さらに、教学と、それによって立つ教団の根源である「同朋」という人間関係を生みだすべき「同朋会運動」そのものが問われたという意味をもっていました。またその批判は、言葉をとり繕って応え得たとし得る問題ではなく、大谷派はまさしく「事実」をもって応えなければならない課題を突き付けられたという、そういう事態に立たされたのです。ここに「危機」と言った意味は、教団の起死回生をかけた信仰運動であった同朋会運動を推進する人々においても、この事件の問いかけるものが十分に理解されなかったことにあります。朝野温知はそのことに心を痛めていました。

また、糾弾会後7年たった1977年11月2日夕刻、当時「大師堂」とよばれていた御影堂で時限爆弾が爆発しました。その翌日、爆破

決行者から、なぜ爆破を行ったかという爆破理由を述べた決行声明文といえる文書が出されました。

この混乱の中で教学会議がもたれ、教学研究所の名前で「『闇の土蜘蛛』の大師堂爆破声明について」という文書が出されましたが、この文書が必ずしも問題を正確に浮かび上がらせていなかったことが、朝野温知をいよいよ苛立たせ、激しい響きの発言を生んだといえます。

それは、「同朋教団建設を訴える」（『真宗』1981年1月号所載）という形で現れました。難波別院輪番差別事件による糾弾会は一応区切りがついた頃でありましたが、この文章は、同和関係寺院協議会の結成を機に、「同朋教団」への朝野の願いが、数年間のモヤモヤした思いをぶつけるようにして表現されたものでありました。彼は、太平洋戦争終結後の1945年10月に得度し、翌年1月に大谷派教師資格を取得しました。それは、どこかの寺の住職になりたいためでもなく、ましてや経済的に有利な道を選んだことでもなく、朝野の真宗人として生きようという決意を示すものであったと思われます。その期待が、次々と裏切られていったという思いが、朝野温知にこの小論を書かせたと言えるのではないかと考えています。

朝野の、「この真宗の世界性というものの、人類的普遍性というものが、まったく公然と欠落してしまっているように見えるのはどういうことなのだろうか」、「東本願寺当局がこの事件をどのように受け止めるかということについて、非常に注目してきたのであったが、時間が経過するにしたがって、問いつめられた核心的な問題点は完全に空洞化されてきたことに大きな失望を感じている」、「肝心の問題点に対しては歯がゆいほどに要領をえないことは、問題意識が全然違うからであるとしかいいようがなかった」という言葉を読むと、朝野の歯ざしりが聞こえてくるようにさえ感じられます。それは、「第三人」と差別を受け続けた朝野温知にして最もリアルに感じられた怒りにも似た「歯がゆさ」であっただろうと思われます。しかし、差別を受けてきた者も受けてこなかった者も、共に世界性を生きることが、朝野温知の願い続けたことであつたと思われます。

●僧職にあるものは、時と所をえらばずに、真実信心の現代的あり方を身証説法せねばなりませんし、一般門徒の方々は、御恩報謝の今日のあり方を実行すべきであります。これは犠牲の要求ではありません。私たちの人格の完成のために、優越観念を取り去ることによって、自分が信心する如来に自らを高めてゆく行なのです。その総和が日本人の民族性を止揚して、部落の完全解放を可能ならしめるとともに、世界平和の推進勢力となることができるようになります。(「差別をこえて」／1957年6月／真宗大谷派同和会発行)

●浄土真宗は、聖人君子の教えではない。煩惱具足の凡夫が救われてゆく道である。救われるということが非現代的に聞こえるならば、人間完成に向かう道だといってもよい。そして、われわれ僧職にあるものも、本来は、祖師が「非僧非俗」といわれ、「加古の教信はわが定なり」といわれたように、寺院にこもって読経することを職業とするものではなく、大衆の中であって、大衆とともに、浄土を欲求してゆく行者であるべきである。

縦にも横にも、そして時間的に空間的に無限にひろがるつながりの中に生きている人間が、押し寄せてくるありとあらゆる制約をはねのけて、つねに自由で、つねに幸福に生きることは許されないことである。それらのものから受ける苦悩こそ、人間が感情をもって生きている動物だということでもあるし、それを煩惱具足と内観することができるということが、人間に霊性があるからだということもできるのであろうが、とにかく、それら自然と人生から受ける制約から解脱してゆく道を教えるのが浄土真宗である。

(「解放を求めて」／1961年2月／真宗大谷派同和会発行)



●クニ婦人とともに、1950年頃



●ご家族とともに、1954年12月



●広瀬保育園で子ども等と写る朝野温知師
一番後ろの左に朝野、隣がクニ婦人、そして母



●子どもたちと一緒に写る朝野夫妻

一日中働く大人たちが多い中、保育園以外にも時間外託児所をしていた。子どもの入浴や夕食をすませ、寝間着を着せて親に返したという。



●野間修師、1966年

1925年、朝野は民族的な悩みを抱いて宗教に道を求め、東本願寺の宗務所で社会課課長の武内了温、録事であった野間修と出会う。朝野師の長男の司婚を勤めるなど、公私の分け隔てなく支援を惜しまなかった。信楽会館では今も野間師の写真が飾ってある。武内とともに大谷派真身会を設立。後の大谷派同和会会長。1969年死去。

●わたしはいま、部落差別をとりあげております。まず、はじめにうたいたいことは、念仏者は差別から逃避してはいけないということであります。そこは、針のむしろよりも辛いところではありますが、如来は荷負群生といわれました。真実の光明は、現実社会の苦悶のなかからのみ、みいだされるものであります。

(『光明への道』／1966年／真宗大谷派同和会発行)

●差別と貧乏に苦しんで、宗教に道を求め、差別と闘う人たちの中に仲間を求めて部落に入ったのに、そこには闘う姿はなく、荒んだ人たちより一段高いところに立って部落大衆を教化する人たちの助手としての立場にある自分というものに、たいへん良心的な苦しみをおぼえて、いたたまらなくなり、六ヵ月ほどでその部落を去ったが、〔下略〕

(「わたしの歩んだ道」／1968年)

●現に差別に苦しみぬいた朝鮮人の私が、この二人に出会ってはじめて国境を越えた人間愛というものを知った。そして、この二人によって私は部落解放運動に導かれ、それを畢生の事業とするようになった。しかし、東本願寺という大教団の立場からみれば、まことに身のほど知らぬ者と思われるが、今日のこの教団は、解放運動には大きな壁になっている。いくら本来の真宗精神はそんなものでないといってみても、反動的な現実の宗門を動かしているものは、魂の抜けた保守的な伝統でしかない。

(「野間修師を悼む」／『荊冠の友』第34号／1969年4月1日)

●今日の社会に御同朋御同行は決して生きておらないと、こういう歎きを感じるわけですが、そういう意味合いで、なおさら私は、こういう御同朋御同行が、口ぐせのように昔からいわれてきたから何か良いような幻想をもって、何かオブラートに包んだ薬のようにみんなにすすめるようでは、若い者の心の中に入り込まないということで、こういう世界の実現、開顕というものを努力していかなきゃならん。それが真宗教団の今後の目当てでなければならんのではないか。

(「真宗教団と同和問題」／1970年／真宗大谷派職員会学習会記録)

●要するに、教団問題も同朋会運動を通して家族制度の崩壊に見合うように「家の宗教から個の宗教へ」の方向転換にとどまり、親鸞の信仰の真実の「まこと」、一切衆生の救われる世界の実現ということへの着眼にまでは発展してゆくには門口が開かれてこなかった。そこから「靖国問題、同和問題、沖縄問題、在日朝鮮人問題がある中で、今回のアイヌ民族抑圧問題を指摘した声明文を、われわれのところでどう受けとめるか」ということがあったが、これはあまりにも直視的な考え方であって、このように並べると、大変な問題がバラバラにたくさんある中に、今その上にもう一つアイヌモシリの問題をもち込まれては大変戸惑を感じるといことなのだと思うけれどもここに並べたすべての問題は、所謂被抑圧民族をつくりあげた天皇制日本に密着して生き延びてきたということに対する、王法為本的な御用教団的性格への反省の呼びかけなのだと思うことを認めなければならないと思う。

(「提言 同朋教団建設を訴える」／『真宗』1月号／1981年)

●東本願寺派教団が、現在の泥沼的苦悶から抜け出して、同朋教団として再生を願うなかで考える「同朋」とは誰を名指すのかというような奇妙な設問をすべきでなく、われわれの目指す「同朋」とは世界中のすべての人間であって、島国に閉鎖されて生きている皇国臣民的な感覚でしか、親鸞教学が認識されない人々のみをいうのではないことをハッキリしてくれということである。

(「提言 同朋教団建設を訴える」／『真宗』1月号／1981年)



●信楽会館の玄関の表札



●『真宗』における「提言 同朋教団建設を訴える」1981年

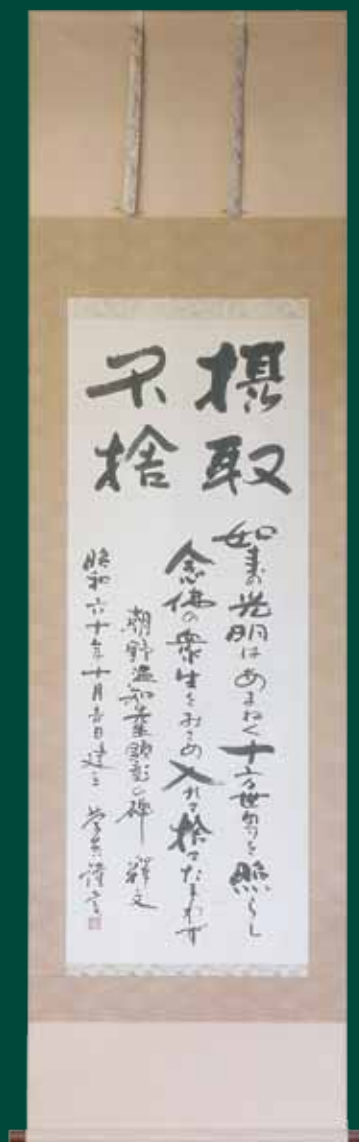
大谷派への部落解放同盟からの糾弾、開申事件、大師堂爆破事件など、次々に起きる宗門の危機的状況に対する朝野による提言。

関連年表

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 1906 | 李壽龍、朝鮮京畿道坡州郡州内面坡州里に生まれる。5人兄弟の3番目(姉2人、妹2人)で、家族は母方祖母と両親。 | 1943 | 戦争の激化により、常磐学園が産業青少年特別練成京都道場とされ、道場の主事として敗戦をむかえる。 |
| 1910 | 韓国「併合」。日本が朝鮮を植民地化する。 | 1945 | ポツダム宣言受諾。
得度をする。 |
| 1914 | 父死去。京城(現ソウル)近くの高陽里に移り住む。
日本、第1次世界大戦に参戦。 | 1946 | 教師資格を取得。
東本願寺社会部から同和事業滋賀県駐在員の辞令を受け、滋賀県伊香郡木之本町に定住。
日本国憲法発布。 |
| 1918 | 単身で京城に出て働く。 | 1947 | 外国人登録令施行。児童福祉法公布。 |
| 1919 | 朝鮮で3.1独立運動が起こる。 | 1948 | 部落解放同盟滋賀県連合会書記長になる。
大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国樹立。
国連の第3回総会において世界人権宣言が採択される。 |
| 1921 | 大谷派社会課設置。 | 1949 | クニと結婚。(野間修が司婚) |
| 1922 | 全国水平社創立大会。 | 1950 | 外国人登録違反で摘発。懲役8ヵ月・執行猶予3年の判決。
朝鮮戦争始まる。 |
| 1923 | 関東大震災で朝鮮人虐殺事件、無政府主義者の大杉栄らが殺される。 | 1951 | 強制退去命令により逮捕され長崎の大村収容所に収監されるが、村の有志や東本願寺、解放同盟、社会党等の救出運動により強制送還を免れる。 |
| 1924 | 日本へ渡航。連絡船内で民族差別を体験する。京城日報社東京支局に社員として住込みで働く。 | 1952 | 外国人登録法施行。
木之本町で広瀬保育園を開設。 |
| 1925 | 治安維持法、普通選挙法公布。
「内鮮融和」問題で支局長と対立して退社。暮れに東本願寺を訪ね、社会課録事の野間修、課長の武内了温に会う。 | 1953 | 園長として経営にあたる。
大谷派真身会解散。 |
| 1926 | 大谷派真身会設立。
滋賀県犬上郡河瀬村広野にある説教所(普賢寺の前身)に半年ほど入る。 | 1954 | 大谷派同和会発足。 |
| 1927 | 北丹後での地震にともない、東本願寺から峰山簡易幼稚園に被災児童の救護班として送られ、主事として半年ほど勤める。 | 1960 | 帰化申請をし、許可される。 |
| 1928 | 大谷大学専門部に入学する。この時に橘了法と出会う。 | 1962 | 同朋会運動はじまる。 |
| 1929 | 再び広野の説教所に戻る。 | 1963 | 木之本町議会議員になる。(1期のみ)
狭山事件起こる。 |
| 1930 | 母死去。 | 1965 | 部落解放同盟滋賀県連合会副委員長になる。(5期連続) |
| 1931 | 「満洲事変」起こる。
説教所を出て広野に一軒家を借りて生活。 | 1967 | 難波別院輪番差別事件起こる。 |
| 1935 | 無政府共産党事件で検挙。治安維持法違反により2年6ヵ月間投獄される。(罪名:目的遂行罪) | 1968 | 武内了温死去。
解放同盟中央委員になる。広瀬区長を連続3期勤める。 |
| 1936 | 思想犯保護観察法公布。 | 1969 | 野間修死去。
開申事件起こる。 |
| 1937 | 日中戦争始まる。 | 1970 | 大谷派同和会が真宗大谷派同和委員会に改称し、委員長になる。年度末をもって解散。 |
| 1938 | 刑務所を出所後、保護観察処分を受ける。松林寺(兵庫県)に住む。 | 1971 | 大谷派同和部設置。 |
| 1939 | 朝鮮京城で開かれた時局対応全鮮思想報国連盟第一回大会に参加するため、朝鮮に一時帰国。緑旗連盟梧柳洞農生塾を訪問。
第二次世界大戦始まる。
朝鮮総督府が創氏改名を強制。朝鮮人労働者の強制連行始まる。 | 1977 | 大谷派同和部を廃し同和推進本部発足。
「大師堂」爆破事件がおこる。 |
| 1940 | 創氏改名により名前を「朝野温知」に改める。 | 1981 | 「信楽会館」新築竣工。 |
| 1941 | 京都で要保護少年収容施設である少年保護団体常磐学園の保護係となる。
大谷派社会部内鮮融和事務を囑託される。
アジア・太平洋戦争始まる。 | 1982 | 朝野温知死去。 |

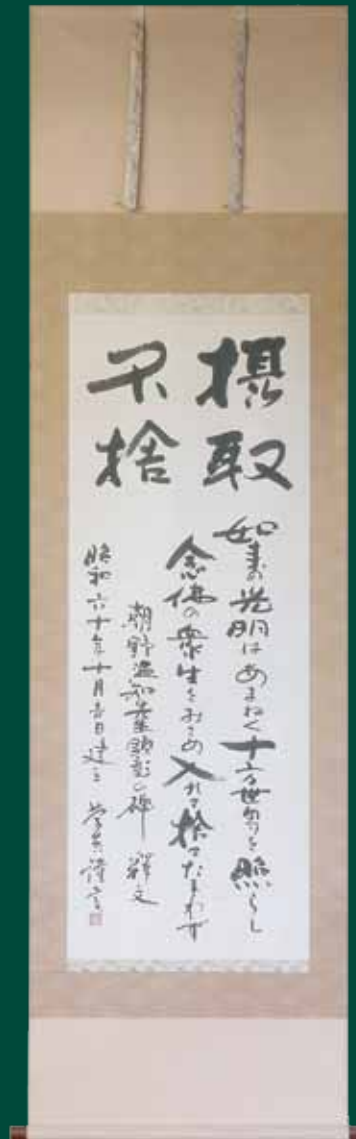
関連年表

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 1906 | 李壽龍、朝鮮京畿道坡州郡州内面坡州里に生まれる。5人兄弟の3番目(姉2人、妹2人)で、家族は母方祖母と両親。 | 1943 | 戦争の激化により、常磐学園が産業青少年特別練成京都道場とされ、道場の主事として敗戦をむかえる。 |
| 1910 | 韓国「併合」。日本が朝鮮を植民地化する。 | 1945 | ポツダム宣言受諾。
得度をする。 |
| 1914 | 父死去。京城(現ソウル)近くの高陽里に移り住む。
日本、第1次世界大戦に参戦。 | 1946 | 教師資格を取得。
東本願寺社会部から同和事業滋賀県駐在員の辞令を受け、滋賀県伊香郡木之本町に定住。
日本国憲法発布。 |
| 1918 | 単身で京城に出て働く。 | 1947 | 外国人登録令施行。児童福祉法公布。 |
| 1919 | 朝鮮で3.1独立運動が起こる。 | 1948 | 部落解放同盟滋賀県連合会書記長になる。
大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国樹立。
国連の第3回総会において世界人権宣言が採択される。 |
| 1921 | 大谷派社会課設置。 | 1949 | クニと結婚。(野間修が司婚) |
| 1922 | 全国水平社創立大会。 | 1950 | 外国人登録違反で摘発。懲役8ヵ月・執行猶予3年の判決。
朝鮮戦争始まる。 |
| 1923 | 関東大震災で朝鮮人虐殺事件、無政府主義者の大杉栄らが殺される。 | 1951 | 強制退去命令により逮捕され長崎の大村収容所に収監されるが、村の有志や東本願寺、解放同盟、社会党等の救出運動により強制送還を免れる。 |
| 1924 | 日本へ渡航。連絡船内で民族差別を体験する。京城日報社東京支局に社員として住込みで働く。 | 1952 | 外国人登録法施行。
木之本町で広瀬保育園を開設。 |
| 1925 | 治安維持法、普通選挙法公布。
「内鮮融和」問題で支局長と対立して退社。暮れに東本願寺を訪ね、社会課録事の野間修、課長の武内了温に会う。 | 1953 | 園長として経営にあたる。
大谷派真身会解散。 |
| 1926 | 大谷派真身会設立。
滋賀県犬上郡河瀬村広野にある説教所(普賢寺の前身)に半年ほど入る。 | 1954 | 大谷派同和会発足。 |
| 1927 | 北丹後での地震にともない、東本願寺から峰山簡易幼稚園に被災児童の救護班として送られ、主事として半年ほど勤める。 | 1960 | 帰化申請をし、許可される。 |
| 1928 | 大谷大学専門部に入学する。この時に橘了法と出会う。 | 1962 | 同朋会運動はじまる。 |
| 1929 | 再び広野の説教所に戻る。 | 1963 | 木之本町議会議員になる。(1期のみ)
狭山事件起こる。 |
| 1930 | 母死去。 | 1965 | 部落解放同盟滋賀県連合会副委員長になる。(5期連続) |
| 1931 | 「満洲事変」起こる。
説教所を出て広野に一軒家を借りて生活。 | 1967 | 難波別院輪番差別事件起こる。 |
| 1935 | 無政府共産党事件で検挙。治安維持法違反により2年6ヵ月間投獄される。(罪名:目的遂行罪) | 1968 | 武内了温死去。
解放同盟中央委員になる。広瀬区長を連続3期勤める。 |
| 1936 | 思想犯保護観察法公布。 | 1969 | 野間修死去。
開申事件起こる。 |
| 1937 | 日中戦争始まる。 | 1970 | 大谷派同和会が真宗大谷派同和委員会に改称し、委員長になる。年度末をもって解散。 |
| 1938 | 刑務所を出所後、保護観察処分を受ける。松林寺(兵庫県)に住む。 | 1971 | 大谷派同和部設置。 |
| 1939 | 朝鮮京城で開かれた時局対応全鮮思想報国連盟第一回大会に参加するため、朝鮮に一時帰国。緑旗連盟梧柳洞農生塾を訪問。
第二次世界大戦始まる。
朝鮮総督府が創氏改名を強制。朝鮮人労働者の強制連行始まる。 | 1977 | 大谷派同和部を廃し同和推進本部発足。
「大師堂」爆破事件がおこる。 |
| 1940 | 創氏改名により名前を「朝野温知」に改める。 | 1981 | 「信楽会館」新築竣工。 |
| 1941 | 京都で要保護少年収容施設である少年保護団体常盤学園の保護係となる。
大谷派社会部内鮮融和事務を囑託される。
アジア・太平洋戦争始まる。 | 1982 | 朝野温知死去。 |



真宗大谷派
東本願寺
higashiHonganji
Shinshu Otani-ha

真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部
〒600-8505京都市下京区烏丸通七条上る常葉町
TEL 075-371-9247



真宗大谷派
東本願寺
nigashihonganji
Shinshu Otani-ha

真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部
〒600-8505京都市下京区烏丸通七条上る常葉町
TEL 075-371-9247